

1970年代

100年の転換点
疾病構造と人口構造の変化

感染症から成人病へ、若い社会から高齢社会への変化

1970年代、結核などの感染症が減少し、脳卒中や心臓病など、当時「成人病」と呼ばれた病気が増加しました。同時に少子高齢化も進み、医療費は増大。健保組合は、現役世代と事業主の保険料で国民皆保険を支える中、新たな課題に向き合うことになりました。

1970

感染症から成人病へ

結核などによる死亡が減少する一方、脳卒中や心臓病などが主要な死因となり、疾病構造が大きく変化しました。

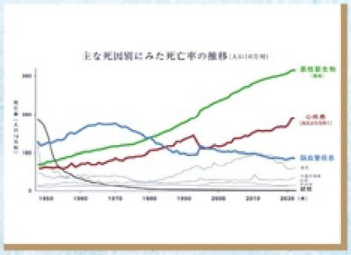
高齢化社会へ突入

65歳以上の人口が総人口の7%を超え、日本は「高齢化社会」へ突入しました。その後も高齢者人口の割合は上昇を続けました。

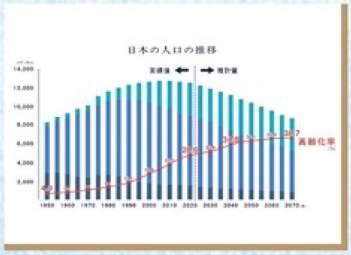
1973

老人医療費無料化（福祉元年）

1960年代後半に入ると地方自治体が始めた老人医療費無料化が全国に拡大します。厚生省は関係審議会の議論を経て、老人福祉法を改正し、老人医療費を無料化する老人医療費支給制度を創設。対象者は70歳以上で、医療機関の窓口で支払う自己負担額を公費で賄うこととしました。



出典：厚生労働省「令和7年版厚生労働白書」を基に作成



出典：厚生労働省「令和7年版厚生労働白書」を基に作成